

# 知的障害者と大学生との合同ダンス練習会について

大分大学教育福祉科学部 麻生和江

知的障害者 社会福祉法人シフォニー利用者と大分大学生との合同ダンス練習会は1988年4月から開始、現在も継続している。その経過と成果を踏まえ、今後の展望を述べたい。

## 1. 経緯

- 1) 契機：同年12月に大分大学主管全国創作舞踊発表会開催された。知的障害者と大学生の共同によるダンス作品の創作と作品上演はどこまで可能か、可能な範囲で何らかの成果はあるはず。その成果を全国大会で披露しよう。契機は、簡素な発想であった。
- 2) 活動内容：毎年4月から毎月1回大学体育館で合同練習会を開催。毎回10名程度のグループを作って自己紹介、ストレッチング、リズムダンス、グループで課題を見つけて簡単な創作、発表(1回約2時間)。初年度の参加者はシフォニー利用者13名、大学生45名。昨年からシフォニーの意向を受け大学生有志が施設でダンス教室(毎週1回)を開催している。
- 3) 作品構成：初年度、作品は生活から題材をとった1分～2分程度の6スケッチと3分半程度の全員が参加するリズムダンスにより構成(全約10分)した。

題材やリズムダンスの曲目は変わるが、これらの内容や作品構成方法は継承されている。

## 2. 参加者における成果

- 1) シフォニー利用者：舞台での演技、大学生との友好、大学の体育館に来ること等を楽しもむ様子は筆者の目だけではなく、大学生、保護者、職員の観察から確認出来た。一般に開催される舞踊公演の鑑賞のための外出する事も多くなった。これを、社会的視野が拡大し、興味ある物のために積極的に行動出来るようになったと分析し、この取り組みの最も大きな成果とする評価もある。参加者は年々増加の傾向にある。
- 2) 大学生：楽しい、参加すれば手応えがある等の感想が寄せられた。活動開始時は戸惑いがちであったが、活動を通して、同世代を生きる者同士である認識と同時に、知的障害が「あること」と「無いこと」の違いへの理解を深めた。自主的参加者が増加している。

## 3. 外的評価

大学内発表会で観客に実施した作品感想アンケートでは、シフォニー利用者と大学生の共同作品は、感動した、元気がある、生き生きしている、楽しい、よい取り組み等、概ね好評価されていた。しかし、僅ではあるが、知的障害者への差別ととれるような意見、いわゆる差別と区別の曖昧さから招来される見解の相違等、批判的回答もみられた。

## 4. 今後の展望

手助けと受け入れが整えば、知的障害者の社会進出の意欲・行動力は確実に高まる。障害について特別な知識を持たない人が、それをあたり前に行動出来る社会が求められる。筆者と学生は自分が出来ること(ダンス)を通して、小さい実践を重ねていきたい。